



博物館だより

Nagano City Museum

第126号

長野市立博物館収蔵の竹細工

夏季企画展「〴〵丈夫で美しい、一戸隠の竹細工とくらし」より



手籠（生産地：戸隠中社 使用地：戸隠栃原）

今回の博物館だよりでは、夏季企画展「〴〵丈夫で美しい、一戸隠の竹細工とくらし」（令和5年7月15日から9月24日まで）から、長野市立博物館収蔵の戸隠の竹細工について紹介します。そして、長野市域の人々のくらし（日常生活）の中でどのように竹細工が使われてきたのかを見ながら、戸隠の竹細工づくりの今昔を紹介します。

1 根曲がり竹と戸隠の竹細工

根曲がり竹

根曲がり竹とはチシマザサの若竹のことです（写真1）。根元から曲がって生えていることが多いため、信越地域や東北地域では根曲がり竹と呼ばれてきました。



写真1 戸隠に生えるチシマザサ

山竹・姫竹とも呼ばれ、雪深い地域で親しまれてきたものです。例えば、重要有形民俗文化財の「十日町の積雪期用具」にも、根曲がり竹を使った多くの竹細工が含まれています。信越地域で生活に根付いてきたものであることがうかがい知れます。

戸隠では、長年根曲がり竹を使った竹細工がつくられてきました。根曲がり竹は、長野県内では戸隠以北に多くみられ、戸隠や信濃町、中野飯山地域で多く使われてきました。かつては各地でつくられていましたが、長野市域で現在も多くつくられているのは、戸隠だけとなりました。

〈戸隠の竹細工〉

戸隠の竹細工職人は、様々なこだわりをもって竹細工をつくっています。ここでは、その代表的なものを紹介します。

コンピラツギ

戸隠の職人は、竹を継ぐ時の継ぎ方にこだわりを持っています。素材の竹が一本編

み終わる時、写真2（図1）のように末端を処理し、竹を継ぎます。この継ぎ方は、コンピラツギと呼ばれます。多くの竹細工は、竹の端を別の竹の網目に差し込む、あるいは単純に端を別の竹に巻きつけて竹を継ぎますが、戸隠ではコンピラツギで竹を継ぎます。コンピラツギで継ぐと、丈夫に美しく仕上がるとされます。



写真2 コンピラツギの例

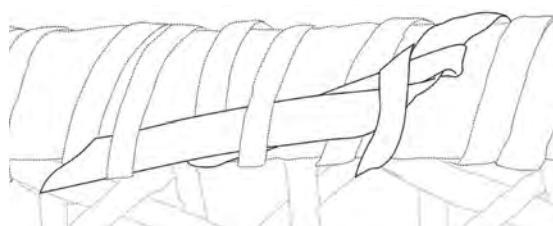


図1 コンピラツギの図

一人前は「美しい」素材をつくる。

良い竹を選び、タケワリ、ヒゴヒキを丁寧に行い、綺麗に仕上げます。この素材の出来が編んだ後の竹細工の出来を左右するため、素材を美しくつくることが、戸隠の職人として一人前となる条件の一つなのです。

フチは「美しく」

戸隠の職人には、フチにこだわる人が多いです。箕や籠のフチが美しいと、出来栄が違って見えるといいます。美しいフチをつくるためには、二バ⁽¹⁾は使わない、形を整える、目を飛ばさずに十分に巻くことが必要です。（樋口明里）

2 くらし—生活の中の竹細工—

くらしの道具

（日常生活の中で使われた竹細工）

竹細工は、生活の様々な場面で使われてきました。ここでは、戸隠でつくられたものを中心に、他の地域でつくられたとみられるものも交えながら、日々の生活の中で使われた竹細工を紹介します⁽²⁾。

スノウ・トウジ籠



写真3 スノウ・トウジ籠
(生産地…戸隠)

茹でた麺などの食べ物をすくい、水を切るための道具です。トウジ籠の中で麺などをそのまま茹でる事もありました。

苗籠



写真4 苗籠
(生産地…不明
使用地…安茂里)

苗代で育った稲の苗を、代掻きの済んだ田へ運搬する道具です。2個一組として天秤棒で前後に担いで使われます。水切りをよくするため籠の目が粗いのが特徴です。

み箕



写真5 箕
(生産地…戸隠
使用地…石堂町など)

脱穀した穀物を入れ、フチを持ちながら上下左右に動かして穀物と藁屑などを選別するための農具です。また、近距離での運搬にも使われます。農家にとってなくてはならない道具の一つとされています。

竹籠



写真6 竹籠
(生産地…戸隠
使用地…戸隠)

日常的に様々な用途に使われていました。果物や収穫物、日用雑貨を収納や保存するための道具です。

乾燥籠



写真7 乾燥籠
(生産地…戸隠
使用地…戸隠)

野菜などを薄く広げて天日干しにし、乾燥させるための道具です。

ウケ



写真8 ウケ
(生産地…不明
使用地…川中島・篠ノ井)

水中に設置し、魚類を捕獲するための道具です。魚類の習性を生かしてつくられているのが特徴です。ウケの中にはカエシが仕掛けられていて一度入ったら出ることが出来ないという仕組みになっています。狙う獲物によって大きさが違い、使い分けを

しながら漁をしていました。戸隠でつくられて売られていたわけではありませんが、長野市域で使われたウケには竹が使われていました。素材としては、根曲がり竹だけでなく、真竹や淡竹が多く使われていました。

ビク

捕獲した魚類を入れるための道具です。魚類の特徴によって使い分けられています。

(三浦史)



写真9 ビク(生産地：戸隠か
使用地：松代町など)

くらしの道具をつくること

先に紹介した道具は、全て長野市域内で使われていたものです。戸隠でつくられたとみられるものを中心に紹介しましたが、須賀川（山ノ内町）産のものなども、当館には収蔵されています。昭和30年代までの長野市域内には、戸隠だけでなく、現在の山ノ内町や中条から竹細工を売りに来ていました⁽³⁾。各地で冬の農閑期の仕事、副業として竹細工をつくることもあり、自宅用の籠やカンジキなどをつくっていました。昭和40年頃までは、戸隠以外でも竹を使った道具をつくっていたのです⁽⁴⁾。竹が身近な素材だったことがうかがえます。

現在は、まとまった量の竹細工をつくっている地域は、長野市域では戸隠だけとなりました。戸隠でつくられてきた道具には、職人による工夫がなされています。先に紹介したくらしの道具の内、スイノウ・箕・

乾燥籠に見られる工夫を紹介します。

スイノウ

戸隠のある職人は、柄とフチになる竹が曲がらないように工夫をしていました。柄の右側に竹の太い方を使います。右利きの人が使う時に、右側の竹が細いと右側に曲がってしまうため、それを防ぐために右側の竹を太くするのです。左側の竹が太いものも多くありますが、戸隠にはそうしたこだわりをもってつくっていた職人がいました。また、「ダレル」（図2のように曲がる）と使いにくくなるため、根曲がり竹の自然の曲がりを利用しながら、側面からみて図3のようになるようにつくります。



図2「ダレ」て使いにく
くなったスイノウの
例



図3 戸隠の職人がつく
ったスイノウの例

箕・乾燥籠

竹細工の多くはアム（編む）ものですが、箕と乾燥籠はオル（織る）ものです。織る竹細工は道具を使い、布のように竹を織り込んでいくため、編む竹細工と違い、特別な道具と技術を必要とします。箕や乾燥籠は、あまり需要がなくなってしまったため、現在はこの技術で箕や乾燥籠をつくる職人はほとんどいません。しかし、かつては生活する上で不便がないように工夫し、つくられていました。例えば、箕の口は、地面につけた際にぴったりと地面につく方が使いやすいとされています。そのため、緩やかに曲がるように織ります。

3 養蚕・りんごで大活躍 —その時々—

養蚕

昭和 20 年代頃まで、戸隠で一番売れたのは蚕籠だったといわれています。

養蚕は、かつて長野市の各地で広くおこなわれていました。そのため、蚕籠が多く使われたのです。蚕籠は、蚕の寝床となる台です（写真 10）。この上に蚕座紙と呼ぶ紙や藁製のスクラを置き（写真 11）、桑をあたえ、蚕を育てました。写真 12 のような棚にこれを置いていました。蚕籠は竹を編んで作られていたため、戸隠でも多くつくられ、長野市に卸されていました。



写真 10 蚕籠

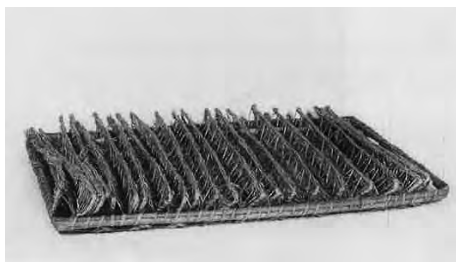


写真 11 スクラを設置した蚕籠



写真 12 蚕棚
かつて農家に設置されていたがつかわれなくなった様子

養蚕が盛んだった時期には、他にも、繭うけ箕など、養蚕で使われた竹細工がよく売れていました。桑ボテも、養蚕に使われた道具で、写真 13 のようにかついで桑を運びました。桑ボテは真竹を使ったものも多くみられ、戸隠以外の地域のものが多かったとみられますが、様々な竹細工が養蚕で使われていたことがうかがえます。こうした道具は、養蚕があまり行われなくなると需要が減ってしまい、その後、りんご栽培に使う竹籠が売れるようになりました。



写真 13 「昭和 35 年頃 養蚕の桑つみに」
中条での桑つみの様子を写した写真

りんご栽培

りんご生産地である豊野には、多くのりんご籠が売られたといわれています。鬼無里・芋井・豊野は、戸隠の竹細工がよく売れたところだったと、昭和 20 年代を知る人は話しています。豊野町誌に収録されている内容から、りんご栽培で使われた竹細工についてみてみましょう。

収穫したりんごの運搬は、りんご栽培をはじめた当初は田つぼ（天秤棒に下げて稲の苗運びに使うもので藁製）を使っていま

したが、後に竹籠が使われるようになりしました。木から実をもぎとる時、片手で竹籠をさげながら片手でりんごをもぎとることができたため、重宝されました。また、りんご籠は重いりんごを入れるものであるため、丈夫なものがよいとされていました。この竹籠の多くが、戸隠で作られた竹細工でした。

昭和 30 年代のりんごの箱詰め作業を写したと思われる写真（写真 14）⁽⁵⁾ には、竹籠から木のりんご箱にりんごを移している様子が映っています。しかし、写真「りんご娘のモデル撮影会」（写真 15）⁽⁶⁾ には、プラスチック製と思われるカゴが写っています。この写真は、昭和 41（1966）年に国道 18 号（通称アップルライン）が開通した際に、りんごの広報のために行われたモデルの撮影会の様子と見られます。「りんご娘」とされるモデルの女性が、手にプラスチック製のカゴを持っていることから、当時、竹籠は使われなくなっていたのではないかとみられます。昭和 30 年代までは多く使われていた竹籠が、昭和 40 年代には使われなくなり、プラスチック製が使われるようになったことがうかがえます。

実際に、りんご用の竹籠は、プラスチックの普及によって売れなくなったといわれ



写真 14 りんごの箱詰め作業（豊野）



写真 15 「りんご娘のモデル撮影会」（豊野）

ています。りんごなどへの転換をせずに養蚕を続けていた家もありましたが、養蚕の多くが昭和 40 年代に行われなくなり、養蚕・りんごで使われた竹細工が使われなくなったのです。竹細工は生活に密着したものであったため、その時々を生産生業の状況によって需要が変化し、それに応じた竹細工がつくられていたといえます。

〇〇 + 竹細工で生活する —戸隠の現代生活史—

戸隠で竹細工をつくってきた人々の中には、竹細工だけで生活していたわけではない人もいました。時代にあわせて様々な仕事をしながら竹細工づくりを続けてきたのです。

昭和 20 年代後半に竹細工を始めた人を例に見てみましょう。昭和 30 年前後には、戸隠中社では多くの人が竹細工をつくっており、中学校を卒業するころには竹細工を始めていました。その頃にはボテ・蚕籠といった養蚕にかかわるものがよく売れていたため、皆でつくっていました。その他にも箕などの生活で使うものを、それぞれが選んでつくっていましたが、「ゼニにならなかった」（十分な収入が得られなかった）ので、「働きに出る」人が多くなりました。例えば、箕は 1 日以上かけてつくるにもか

かわらず、非常に安値となってしまったため、他の仕事をして生活費を稼がなければならなくなったのです。民宿やスキー場での仕事、土木工事の仕事、トラック運転手などをして稼いだようです。

昭和 38（1963）年に戸隠スキー場が開業し、続いて戸隠バードラインが開通したため、昭和 40 年代から戸隠には多くのスキー客が来るようになりました。それに伴い、民宿が盛んになったため、竹細工をしていた家で民宿を営むことも多くなりました。

なお、盛んだった民宿も、長野市街地に至る道路の交通の便がよくなったことなどから、平成 10（1998）年の長野オリンピックを機に利用が減ってしまいました。その後、ナガノ（長野市中心市街地）に仕事を求める人も多かったようです。

このように、収入を得る手段を変化させながらも、戸隠では竹細工を続けた人が多くいました。竹細工と共に何で生計をたててきたかをみると、戸隠の現代に至る変化がみえてきます。

4 戸隠竹細工の今昔 —「丈夫」で「美しい」—

戸隠では、早くから根曲がり竹の販売が行われていたとみられます。「幣軸竹」が江戸時代から善光寺町などに販売されていたことが、真田家文書（国文学研究資料館蔵）からわかります。組合を組織して山の利用の取り決めを行い、竹の販売を仲介しました。それにかかわる文書が当館にあります。江戸時代にも組合で土地利用の取り決めをしていましたが、明治時代になってトラブルがあったため、再度話し合いをして和談した過程などがみられ、大切に土地

利用をしながら竹細工をつくっていたことがうかがえます。また、明治時代初期の文書に「竹簞」などの文字がみえることから、その頃には籠などの竹細工がつくられていたと推察されます。

近代の戸隠の竹細工は、基本的には組合などの仲介で各地に売られていましたが、長野市域の人々は、戸隠講⁽⁷⁾で戸隠を訪れた際などに戸隠の竹細工を購入することがありました。

現在は、戸隠名物の蕎麦を盛るための蕎麦ざるが、戸隠の観光地としての側面と結びついて、人気となっています。また、コーヒードリッパーなど、現代の生活にあわせたものもつくられています。従来の技巧を時代にあわせて活かす取り組みが行われているのです。

安いのはいいこと？

当館には、多くの竹細工が収蔵されています。ほとんどが生活の中で使われたもののため、破損しているものも多くあります。その全てが完全な形で残っているわけではありません。実は、収蔵品の多くが戸隠でつくられたものではなく、他の地域でつくられたものです。中には、非常に簡易なつくりのものもあり、安価につくられたものが多く流通していたことが推察されます。しかし、こうした安価な竹細工をつくっていた人々は、現在まで竹細工をつくり続けることが難しかったとみられ、長野市域ではそうした竹細工はあまり見られなくなりました。それは、私たちの生活スタイルが変化し竹細工が身近でなくなったためですが、竹細工が「買い叩かれてしまった」ことも、要因の一つと考えられます。利益が上がらず、生産者の生活が成り立たないほ

ど安く買い付けられることを、「買い叩かれる」といいます。安く、大量に「買い叩かれる」ことによって、生産者は竹などの材料を節約してしまい、より竹細工の質が落ちてしまうことになります。そうすると、さらに安く買われるようになり、生産者が竹細工をつくり続けられなくなってしまうのです。戸隠では、「買い叩かれる」ことを防ぐために組合を組織しましたが、それだけでなく、品質を保つ努力も行われてきました。

現役の職人の方々に話をきくと、「丈夫」で「美しい」竹細工をつくることにこだわっ

ていることが垣間見られます。先人の職人がつくったものを評する時、そして現在の互いの作品を見た時、「丈夫だねかい」「綺麗だな」「美しいな」と、「丈夫」で「美しい」ことを評価するのです。戸隠の職人には、コンピラツギをすること、フチの形や巻かれた竹が綺麗に揃っていること、ムツメの形が整って均等であること、といったこだわりがあります。このこだわりが実現されている竹細工が「丈夫」で「美しい」とされます。こうしたこだわりを持つ意識も、竹細工を現在に活かす要因になっているのでしょう。（樋口明里）

註

- (1) 竹の内側の部分で2枚目にとれるヒゴのこと。表面がザラザラしていて皮がない。
- (2) 各道具の使用地は寄贈者の証言及び、寄贈者の居住地に従ったため、実際の使用地とは異なる可能性がある。
- (3) 『長野県史 民俗編 第四巻（二）北信地方 仕事と行事』の交易に関する部分〔長野県編 1985 281〕をまとめた。須賀川では現在も竹細工がつくられている。
- (4) 『長野県史 民俗編 第四巻（二）北信地方 仕事と行事』から、戸隠の他、中野飯山地域の各地で根曲がり竹を使った竹細工がつくられ、戸隠以外の長野市域では淡竹が使われていたことがわかる〔長野県編 1985 169～170〕。
- (5) 『豊野町誌3 豊野町の民俗と地区誌』の写真 83〔豊野町誌刊行委員会編 1998 279〕転載。
- (6) 『豊野町誌3 豊野町の民俗と地区誌』の写真 87〔豊野町誌刊行委員会編 1998 289〕転載。
- (7) 地域集団のことであり、その年の代表者が年に一度戸隠神社に参拝に行く。

参考文献

豊野町誌刊行委員会編 1998 『豊野町誌3 豊野町の民俗と地区誌』 豊野町誌刊行委員会
長野県編 1985 『長野県史 民俗編 第四巻（二）北信地方 仕事と行事』 長野県史刊行会

博物館だより 第126号 発行日2023年6月30日

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414
TEL:026(284)9011
<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum>

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原3400
TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659
TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3
TEL:026(262)3500